12月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　12月4日

今日の市は”第55回群馬県優良素材展示会”と併催で行われた。
展示会自体は群馬県の主催だが、毎年県森連はこの展示会の為に優良素材の出品を募り、1ヶ月前には会場作りに掛かる。 事務所前の1～14号土場までを一旦全て空にして椪積み用のアングルも取り除き、きれいに掃除をしてから改めてアングルを並べなおす。
この際普段の並べ方とは異なり、椪の間を少し広くなるように並べる。 展示材を見やすくするためだ。そして出品されて来る優良素材を再吟味して、一番良いと思われる丸太を3.00㎥だけ選び出して、傷を付けない様に慎重に椪積する。 3.00㎥というのは規定で”3.00㎥以上”とされている為で、最低限の3.00㎥をクリヤーすればそれ以上無駄に増やすのは審査会で不利になる丸太を入れる事になる。 どんなに優良素材であっても、1本1本全て個性があり、完璧な丸太など無いのである。
そんな中で、今年開催者の群馬県知事賞に選ばれた素材は下の二点であった。

群馬県知事賞の内さらに優秀なものには、林野庁長官賞も贈られる。
今回は左の写真の物件であった。 受賞された塩浦木材には心からお祝いを申し上げたい。
両方の丸太の木口を比べてみる。左が林野庁長官賞と知事賞・右が知事賞の木口だ。

木口に節が見えるのは大した問題点では無い。 そもそも枝の無い木は存在しないのだから。
ここで注目すべきは、年輪の中心部分だ。 右の丸太は見えている部分で最初の10年程で12㎝程に達している。 10年ほどの幹ではまだ枝が茂っている状態である。この後年輪幅が狭くなっているがこれは隣の木と枝が接する様になり、幹を太くする為の枝葉が増やせなくなる為で、ここから先は日の当たらなくなった、不要の枝が枯れ落ち始める。こうして枝の無くなった部分が無節で目詰まりの良材という事になる。だとするならばこの丸太は枝の茂っていた部分が太すぎると言える。

左の丸太は中心部分の年輪幅が狭く、10年でもせいぜい8cm程度である。これは幼木の内から
余り日照に恵まれず、早い時期から日当たりの悪い枝を落としながら、周りの木よりも少しでも高い所へ
葉を付ける様に、ひたすら上へ上へと伸びた木であるという事が判る。 当然枝の無い部分が分厚くなる
この事を業界用語では”芯が締まっている”とか”芯が開いている、或いは呆けている”などど言い表す。
今回は木口の割れに対しても話題が出た。 展示会ともなると少しでも良い材を出品しようとして
元玉が中心になるが、大径木の元玉には現れがちな割れがある。 大木になると風にゆすられ又は
雪の重みに耐えるなど根元には大きな負荷が掛かる。その結果年輪が剥がれしまう”目割れ”や
芯から放射状に割れる”芯割れ”が生じやすい。

左の割れは割れ口がシャープでささくれが無い、つまりチェーンソウの刃が通過した後乾燥によって生じた
干割れである。 これは深さがせいぜい1～2cmなので、問題ない。
右の割れは割れ口がささくれている。つまりチェーンソウの刃がこの割れを通過した時に出来たささくれであり
伐採する前から幹の中で割れていた事を示している。 この割れは根元から続いてきている割れで
この先どこまで通っているか判らないが、大きさから見てあと1.0m位まで入っている可能性もある。
今回は受賞した同じ山から、根株を付けたままの6.0m材や5.0m材も来ていた。
以下は元玉の”目割れ”の例だ”目回り”とも言い製材する側にとっては大きな幻滅要因だ。

共販には根株を除いたいた長さで6.0m･5.0mで材積計算してあったが、長くて太い物件はほとんど売れない
元玉だからと言って根株を付けるのは無駄にかさばるだけでなく、欠点も露呈するので得策ではない。
出荷者の期待との乖離があり、不落札が多い。1件だけ49号物件は6.0mで13,810円/㎥で不落札だったが
これを4.0mに換算することを条件に15,000円/㎥で売れた。 つまり最初から元口の割れに注意して、ここを
避けて4.0mに伐っていれば高値で売れた事になる。
今回は不落札が目立つが、売り手の感触では「もう少し出荷がまとまれば,まだ行ける」と強気に出たらしい。
但し太くて長い元玉はほとんど売れ残る。 使い道としては、いつ注文が来るとも知れない使い道だ。
今回のような良材で木目の詰んだ物は、節の出る真ん中で平角を取る。これは梁･桁になるから厚みは
12cmで幅は丸太による。その辺材が価値が高く、正目の建具用に挽いて自然乾燥して何時お呼びが
掛かるとも知れない眠りにつく

調査日　素材生産協同組合　12月6日

今回もこちらの市は群馬署の官材が中心となる。椪数は少ないが徹底的に売れる椪だけを出している。
やはり3.0m造材が多く、価格も運賃が有利な加工協同組合が、強めに保っている。
隣接する製材工場は、規模は大きいが3.0mしか挽けない工場なので、この市場へに出荷は
こういう形になる。 しかし3.0mの柱･FJの間柱に特化した工場が、どんどん柱材を生産する中で
4.0mは不足する。 横架材の方が消費量は少ないとは言え、柱だけでは家は建たない。
生産量のバランスが悪く、柱専門工場も過渡期を迎え、柱はだぶつき気味と聞く。
いままで3.0mの柱専門に挽いていた町工場はお株を取られ、4.0mの母屋などを挽いている。
製品市場では、4.0mの母屋･桁･土台の不足は慢性化して居る。
これほど3.0mに偏っているのは、全国的な常識から見れば、かなり特異的であると言わざるを得ない。
夏場の虫害や高含水率の時期を過ぎた今、スギの4.0m材は角材用･中目材　共に順調に売れ始めて
いると思われる。　　”思われる”と言う表現を使ったのは、この先の見通しを判断するには余りにも
市場に出ている物件が少ないためだ。 ともあれ現在は価格も右肩上がりで推移している様だし、今
出荷できる材があれば、ぜひ4.0mで造材するのが良いだろう。
県森連のデータを見ても、応札枚数が驚くほど多い。 不落札が多いのも、売り手の判断としては
今後の伸びに手ごたえがあるのだろう。不落札になった札は、今までと同じつもりで入れた単価であったろう。
しかし　同じ椪に2枚･･3枚･･と札が入れば、1番札になったとしても今までと同じ単価では落札はされない。
夏場の買い手市場で、札が入れば少々安い価格でも虫害の進行と天秤にかけ、或いは秋材が流通
を始めた時に夏材が置き去りにならない様に売っていた時とは状況が変わっている。
2～3回前の市なら売っていたと思われる価格でも容赦なく ”不落札！” としている。
特に 4.0m では売り手と買い手の立場が逆転している事を誇示している様な、不落札の数である。
素生協の市に話を戻すと、こちらでは不落札は発表されないが、針葉樹の4.0m物件で売れ残ったのは
たった1本である。こちらはスギの4.0m中目材･角材用はとても少ないが、こちらでも価格は上がっている。
3.0m材の買い手が柱の専門工場だけになって行く中で、価格は今の所横ばいを続けている。
これに対して4.0mのほぼ同じ太さの椪は、夏場はあれほど動かなかった物が今はほとんど完売しているし
価格についても、3.0mの横ばい価格を上回っている。
国有林材の出荷内容を見ると、3.0mに偏ってはいるが、寸面が揃いすぎている。
ここに出てきている3.0mの上の玉でもうちょっと細い所はどうしたのか？
4.0mの椪もちょっと数量が少ないが、どこへ行ったのかな？　おそらくはシステム販売などの他のルートで
市場を通らずに流通していると思える。今は市場で売るべき時だと思うのだが。
今後の見通しとしては、4.0m材が、どの辺で天井に達するのか？
だぶつき始めていると言う柱材が、この先どうなるのか？
と言った所が注目点だろう。 かつて”国産材は安価な輸入材に押されて売れない”などと言った時代は
遠い過去の話で、スプールスなどは今や高級木材である。ホームセンターの木材売り場を見ても国産材
が様々な形に加工されて並んでいる。 合板などもスギやカラマツが主流だ。
国産材の需要は益々増え、それにつれて求められる形も多様化している。
素材生産も、それを敏感に察知して対応するべきだろう。